

ほなひ歴史通信

第 6 号
1998. 3. 1

企画展に思うこと

町の中央公民館を特設会場として、二月二十一日から三月八日までの十六日間、企画展『水戸藩主・光圀と斉昭の巡村』。そのゆかりの地と遺品展―が開催されています。町の主催による歴史と文化財をテーマにした展覧会は初めての試みであり、期待するところも大きなものがありました。

この企画展では、はじめに水戸藩と大子地方の関係を概説し、そのあと光圀と斉昭の巡村の部に入ります。

まず大子地方へ十一回も訪れている二代藩主光圀の巡村関係では、休息所や宿泊所となった諸家にのこされている拝領物の食器や草鞋、光圀側近者からの書簡、また熊野神社に所蔵される拝領物の獅子頭、法龍寺へ寄進された聖徳太子像などを展示しています。地方の領民と親しく接し、有力者の郷侍や郷士への取り立てや社寺の整理と復興など、藩政の基礎を固めた光圀の巡村の一端を知ることができます。

九代藩主の斉昭は天保五年(一八三四)四月に大子地方を巡村しました。当時斉昭は、郡制の改革をはじめ全領の検地、教育の充実、質素節約の励行など藩政の改革を推進中であり、巡村はこうした改革の進捗状況を見分し、村役人らに対しては勸農を教諭し、善行者や精農家には褒賞をおこなっています。展示資料には、斉昭直筆の和歌扇面や教諭書、褒賞として拝領した三ツ

組盃、紙子羽織、太丁(脇差)などがあります。また、八郎麿(斉昭の八子)や余四麿(同十四子)の書幅も展示しています。

また併設展示として、桜田門外の変の中心人物の一人で井伊大老要撃の後、一年あまりにわたり袋田、生瀬地方に潜伏していた関鉄之介の遺品も展示しています。日録の草稿をはじめ漢詩や和歌の書幅、自作の横笛や硯など彼の遺品は多岐にわたっており、これらの資料からは鉄之介の強固な信念と詩人としての非凡な一面を窺い知ることができます。

今回の展示資料は総数七三点にのぼり、そのほとんどが光圀、斉昭、そして関鉄之介ゆかりの諸家に伝えられるものであり、まさに生きた資料として当時の歴史と文化を如実に表しているものです。こうした展覧会に欠かせないのは、やはり何といっても実物の資料を展示できるや否やであります。成功の鍵は、ひとえにそこにかかっているといっても過言ではありません。

説明や解説のパネルは、展示の構成や内容を理解するうえでとても重要な役割を果たしますが、そうしたパネルからは知識を得ることはあっても、感動を得ることはあまりありません。百数十年、あるいは数百年の時の流れを経て遺されたものには多くの場合、歴史的価値だけでなく、その資料自らのもつ文化的価値が備わっています。そうした資料のもつ価値が私たちに感動を与えてくれるのです。そして、参観者がこの感動を得たときはじめて展覧会が成功であるといえるのです。なぜなら、感動は新たな文化を生み出す原動力となるからです。

今回の貴重な展示資料を長い間にわたり御所蔵され、そして御提供いただきました方々に心から敬意を表し、感謝を申し上げます。大子町には、まだまだ多くの貴重な資料が遺されています。こうした資料の保存こそが、まさに次代に伝うべき文化の原点なのではないでしょうか。

(井上)

明治天皇の茶碗 (一)

桜岡滋弥

私の家に、肥前伊万里製の磁器で明治天皇が幼少の頃に食事に用いられていたという茶碗一個と皿が二枚、桐箱におさめられて現存している。

その茶碗というのは、直径一〇センチ、高さは糸切のところをふくめて五センチ、一六の花びらからなる菊の御紋章が三ヶ所、鳳凰と思われる鳥が三羽、家紋でいえば「菱」に属する絵模様が三ヶ所ある。

次に皿であるが、一枚は直径一二・三センチ、高さは二センチ強、家紋でいえば「亀甲に花」が三ヶ所、そして一家家の紋として知られる「一条藤」の絵模様が三ヶ所、それに鶴が三羽飛んでいる。もう一枚の皿は、直径一四・七センチ、高さは三センチ弱で、「一条藤」が二ヶ所、葉がついた丸型の大根が二本ずつ二ヶ所にあり、さらに二本の大根が離れた形で描かれた絵模様で、これらの大根のうち三個は蕪とも思われる。家紋、絵模様の色彩はすべてブルーである。

染付がブルーであるほかは、これら三個の磁器には一貫性がないことがこれでわかる。

茶碗には菊の御紋章があることから、かろうじて天皇家とのつながりを見出すことができるが、残る二枚の皿については、前述のように紋や絵模様において「一条藤」を除くと関連性がない(ただし、皇后は一家の御出身である)。それに、焼き方(製造過程)を推測するに、それぞれの表面にゴミのような点が多く見られ、本物の職人の手にかかった出来とはとても思えないのである。

これらの磁器が桐箱におさめられていることは冒頭で述べた

が、蓋の内側には一文が記されていて、次のように判読できる。

此陶器

今上及皇后御膳器也

去夏

所賜千臣正定者也今與之

櫻岡老兄請珍重焉

明治九年四月 山口正定識

(この陶器は、今上、皇后—明治天皇と皇后一条美子(のちの昭憲皇太后)—の御膳に使われた器である。去年の夏、臣正定が賜わったが、今これを櫻岡老兄に与えよう。大切にしていたきたい。

明治九年四月 山口正定識す)

明治天皇をはじめ公家諸家は当時貧困にあえいでいたというから、このようないわば粗悪な食器を用いて食事をされていたと考えられないこともない。しかし、疑問が残る。山口正定は、今上、皇后が使用されていた陶器(陶器ではなく磁器)である一個の茶碗と二枚の皿を賜わったと記すが、これは一人用のセットである。あとの一組はどうしたのか。まさか、これら三個の食器を幼い頃の明治天皇と皇后が食事時間をずらして使われたとは考えにくい。実は二セットがあつて、その一つを山口正定が櫻岡老兄にプレゼントしたと考えられるのである。

以上のように疑問の多い代物なのであるが、賜わったほうの櫻岡老兄は、明治天皇が使われていたという恐れ多い器というより、山口正定という人物への義理関係程度の気持ちだったに違いない。なお、ここで「櫻岡老兄」とは私の曾祖父櫻岡八郎のことである。

(つづく)

【史料紹介】

中郷の「佐藤圭一氏所蔵文書」について

佐藤家は近世中郷村（水戸藩領、村高は元禄郷帳で六三四石余）の草分け百姓であり、また幕末期に名主を務めた家柄である。

史料は寛永一八年（一六四一）常州久慈郡保内黒沢中郷村検地帳から明治三五年（一九〇二）までの八五二点であるが、江戸時代の村方史料が中心であり、安政年間から慶応年間にかけての幕末期の史料が多い。

貞享二年（一六八五）中郷村百姓山指銭帳

農民所有の持山を吟味して分付山改帳（所在地、樹木種類、等級、面積など）が作成された。それをもとに指銭帳が作られて、野銭徴収がなされた。

天保一三年（一八四二）中郷村検地始終記

一二年三月一八日〜二八日、一三年二月一〇日〜一七日に藩から検地役人が二回調査をして、三月二六日〜四月晦日検地役人一人が測量を実施したが、その検地の順序について老農佐藤安兵衛が記録した。

安政六年（一八五六）北御支配地理誌御仕立雛形写

加藤善兵衛（寛斎）宛に、村の東西南北の間数・田畑反別・往還道・古戦場・古城跡など三五項目を記した図面を提出するようにとの書き方の見本である。

加藤寛斎は、地誌に明るい水戸藩後期の下級郡吏で、「常陸国北郡里程間数之記」や「加藤寛斎隨筆」などを著している。

安政二年（一八五五）蒟蒻玉及荒粉一人切調査報告

中郷村善兵衛組・安兵衛組の戸数二四戸のうち二三戸が蒟蒻を栽培し、その約半数が首尾付き（仲買人が農家へ、秋の収穫物を抵当にお金を貸し付け、秋に農産物を引き取る）であった。農民は年明け早々には、また前借りを繰り返して生計を維持した。

元治元年（一八六四）模様何談合のため村役人出頭指令

天狗党に加わるため、初原村神永平介が引率して七月二〇日に出発するので、各村から一人ずつ大子村へ集合するよう指示している。

また、「中郷村午御用御配符留帳」によると、安政五年（一八五八）九月三日、初原村神永平介から、庄屋佐藤安兵衛以下八名に対して「しごく、急御用、これあり候条、旅仕度にて、今三日、大子村へ着到あらるべく（書き下し）」などあり、天狗争乱関係の史料が多く含まれている。

元治元年（一八六四）天狗追討のため獵師出動指令

このたび、国賊ども打払いにつき、御郡宰より御達しにまかりなり候については、獵師並びに鉄砲所持の者、残らず、明十六日、大子村会所へまかりいで候ように、なられべく候、もつとも、先達て、御城下へまかりいで候鉄砲の残らず、御持ちいでなられべく候、刻付け、早々、順達、ならるべく候、以上
八月十五日
(書き下し)

これは、益子民部左衛門と黒崎藤衛門との連名で、国賊打払いのため、郡宰より通達があったとして、八月一六日に、獵師並びに鉄砲所持者の大子村会所出頭を命じている。

そのほか、「大子村御陣屋ノ跡之図」・明治三年（一八七〇）御領中寛永一八年以来御城米相場控など、当時の歴史を伝える豊かな史料がたくさん含まれているのである。
(野内)

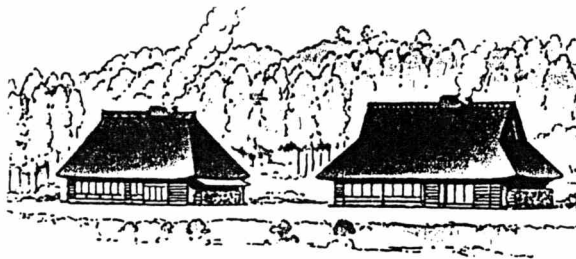
【資料館めぐり】

「小川町民俗資料館」を訪ねて

栃木県那須地方には駒形大塚古墳・那須官衙跡などの遺跡が多く残されています。これらの文化遺産を保護するために「那須風土記の丘資料館」を設け一般に公開しています。

実物大の古墳の石室や竪穴式住居、巾六メートルにも及ぶ奈良時代の東山道の発掘の様子など、模型や映像を使って様々な内容を紹介しており、一見の価値はあると思います。

この資料館の隣に「小川町民俗資料館」があります。これは小川町の民家を移築したもので、元庄屋の小口家と普通の農家の永森家の二棟が建てられており、外観も内部も元のまま当時の農家の暮らしがうかがわれます。



無人なのかと思つて戸を開けてみると囲炉裏には火が焚いてあり、老夫婦が管理人として勤めていました。お茶とせりのおひたしをご馳走になりながら、夜は無人になるが、日中は建て物の保護のために戸を開けて風を入れたり、火を焚いたりしていることなどいろいろお話を聞いてきました。

ちような(手斧)削りの柱や梁はきれいに磨かれ、台所の竈なども当時のまま保存され、内部はきれいに掃除が行き届いていて、いつでも人が住めるような状態に保たれています。永森家の方には町内の有志から寄贈されたという機織り機・むしろ編み機を始め様々な民具が展示しており、懐かしさと共に古い物を大事にしている小川町の姿勢が感じられました。(石井)

【編集後記】

久慈川の水ぬるむ季節がめぐって参りました。柔らかなさを帯び始めた日差しを浴びて、福寿草が、今を盛りと咲き誇っています。そこかしこで何かが生まれる、その躍動感を感じさせてくれる大子の春です。

「ほない歴史通信」第六号をお届けします。第四号、五号と編集人以外のゲスト執筆者をお迎えしていましたが、今号でもその輪はさらに拡がりまして、大字袋田にお住まいの桜岡滋弥さんから玉稿を頂戴いたしました。御存知のように、桜岡家は幕末・維新期における豪農として名を馳せたお家柄ですが、桜岡さんはその子孫に当たられる方です。お書きいただいた「明治天皇の茶碗」は、なお次回連載の予定です。お楽しみに。

井上さんの巻頭エッセーにもありますように、現在、大子町中央公民館におきまして企画展が開催中です。昨年十二月から東奔西走しながら準備の任に当たったのが井上さんでして、その御苦労は充実した展示の内容に見事に結実している、との印象です。大子町で初めて開かれている本格的な企画展が、町の文化財に対する認識を深めるきっかけになることを願わざるをえません。

こうした企画展を見るにつけ、専用の施設が欲しくなります。本誌でも何回か他の自治体の資料館を紹介しました。いつの日か実現することを夢見ながら、情報だけはしっかり集めていきたいと思っております。(斎藤)

編集人

- 斎藤典生(茨城大学人文学部)
- 野内正美(茨城県立歴史館)
- 石井喜志夫(元教員)
- 小澤 罔彦(大子町教育長)
- 井上 和司(大子町社会教育課)

編集発行

遊史の会
 大子町立中央公民館歴史資料室気付
 久慈郡大子町大字池田二六六九番地
 TEL 〇二九五七―二一六二七